



平成 27 年度

平成 28 年 1 月 8 日

事務所だより 第 4 号

益田教育事務所



「五郎丸」選手が好きなもの

所長 領家 芳明

あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

しまねの学力育成推進プランの重点的な取組を行う 2 年間がまもなく終わります。それぞれの学校現場で①授業の質の向上、②家庭学習の充実、③学校マネジメントの強化にむけた取組が行われ、いろいろな場面で実をむすんでいる姿がみられていることと思います。そうした中、今年度の全国学力・学習状況調査において、「算数の勉強が好き」と答えた子どもが少ないことが大きな課題としてクローズアップされました。こうした課題を受けて、プランの柱である「授業の質の向上」の重点課題として、『算数の勉強が好きだ』と答える子どもを増やすための様々な取組がスタートしたところです。



みなさんは子どもたちの「〇〇の勉強が好き」という想いを実感したことがありますか？ そうした想いになる背景には、何があると思いますか？

昨年、日本中を感動に巻き込んだラグビーの日本代表チーム、その中心選手のひとりであり独特のルーティンのポーズを含めて、時の人となった五郎丸選手がテレビのインタビューで語っていたことに次のようなことがありました。

「結局、みんなが自分たちのチームが大好きだったことに、大会中に気がついたんです。4年間、練習にあけくれた毎日には気づかなかったことだけど・・・そこが、大会に参加していた他のチームと日本のチームとの大きな違いではなかったかと思うんです。」

何が彼らを「自分たちのチームが好き」にしたのでしょうか？「4年間積み重ねたもの」とひとことでまとめられるとは思いませんが、チームの歴史そのものが「好き」にさせることにつながったのではないのでしょうか。

ここに「算数の勉強が好き」と思う子どもを増やすためのヒントがあるように思うのです。決して特別なことではなく、特効薬があるわけでもなく、自分たちで納得したためあてを持ち、あたりまえのことをあたりまえに学び続ける毎日と、安心できるすてきな仲間と、ちょっぴりのやる気や自分たちで創りあげる喜びやできない悔しさ、そんな学校生活でしか味わうことのできないかけがえのない毎日が大きく関わってくるのではないのでしょうか。そして、そうした子どもたちに対して、教員の志や職員集団の和と力という味付けが、「算数好き」を育てることによい味を出していくのではないかと思うのです。

益田教育事務所では「ともに育つ」というスタンスで、目の前の姿とともにその背景にも心を注ぎ、子どもたちの成長のために学校への支援体制を整え、管内の教育の充実を目指したいと考えています。『算数の勉強が好きだ』や『〇〇の勉強が好きだ』と答える子どもを増やすことの学校の取組への支援を、市町教育委員会と連携し進めていきます。

ちょっとした疑問や気付きをひとつ、ぜひ、ご相談ください。

子どもたちの学びにつながる「交流及び共同学習」を！

益田市教育委員会 派遣指導主事 大島 義紹

先日グラントワで、映画「みんなの学校（制作 関西テレビ 配給 東風）」を鑑賞しました。大阪市内の公立小学校の実践を映画化したもので、特別支援教育の対象となる発達障がいがある子ども、自分の気持ちをうまくコントロールできない子どもみんな同じ教室で学ぶ様子が随所に見られ（別室で学習する様子も当然見られます）、子どもたちがお互いに理解し合い助け合いながら育っていく様子に、強く心を打たれました。

H24年7月に文部科学省から出された報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム（注1）の構築のための特別支援教育の推進」の中で、「インクルーシブ教育システム」における重要なポイントが挙げられています。

○障がいの有無を問わず、同じ学習の場で共に学ぶことを追求すること

特別支援学校や特別支援学級の児童生徒と通常の学級の児童生徒とが共に活動する「交流及び共同学習」は、運動会などの学校行事や教科学習、給食や清掃活動等での交流、休み時間を生かした活動等の形態で行われています。特別支援学校や特別支援学級の児童生徒にとっては、生活経験を広げ、豊かな学習刺激の中で持っている力を伸ばし、集団生活を通して社会性をはぐくむことが期待できます。通常の学級の児童生徒にとっては、共に活動することを通して、障がいのある人に対する理解を深め、様々な人と共に助け合い、支え合って生きていく豊かな心をはぐくんでいく機会となります。



一方、先の報告の中でもう一つ重要なポイントが挙げられています。

○通常の学級や通級指導教室や特別支援学級、特別支援学校など連続性のある「多様な学びの場」を用意し、個に応じた指導を受けるのに最も適した環境の中で学ぶこと

子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な環境の中で適切な指導及び支援を受け、授業内容が分かり、学習活動に参加している実感・達成感をもちながら、充実した時間を過ごしつつ生きる力を身に付けていくことは、全ての子どもたちにとって非常に重要です。「交流及び共同学習」を行う際には、交流の場や方法が「双方の児童生徒にとって適しているかどうか」という点から十分に検討される必要があり、同じ学習の場で共に学ぶ形態が目的化されてしまえば、本末転倒と言わざるを得ません。

障がいの有無やその他の個々の違いを認め合いながら、個人に適した場所・方法で生き生きと活動し、活躍する「共生社会」の形成に向け、同じ学習の場で共に学ぶ形態を手段の一つとしてとらえ、子どもたちの学びにつながる効果的な交流及び共同学習となるよう計画していきたいものです。

注1

人間の多様性の尊重の強化、障がい者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障がいのある者とない者が共に学ぶ仕組み

未来を担う人づくり ～ものではなく、ひと～

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 澤江 健

我が家の末っ子も来年度からは小学生。日頃、彼のやっていることを見ていると、微笑ましい気持ちになります。例えば、少し前にラグビーワールドカップが盛り上がった時には「五郎丸ポーズ」、そしてその前は「ランニングマン」という風に、流行っている動きをすぐに覚え、真似しています。この他にも、保育園で友だちがやっていることを真似しては、家族の前で披露してくれます。テレビの影響はすごいと思いつつ、次はどんなことをするのか楽しみにしています。

このような子どもの行動は、よく見られる姿だと思いますが、以前次のように聞いたことがあります。

人間は無意識のうちに相手のやっていることを模倣してしまう習性がある。これは、脳の中の「ミラーニューロン」と呼ばれる神経細胞の働きである。この働きがあるから人間は歩き方、動き方、言葉や話し方、考え方、感じ方などを学ぶことができる。

一見すると遊びに見える行動も、子どもにとっては意味のある行動だと言えます。やはり、子どもの成長に最も影響を与えているのは、「人」だと改めて感じさせられます。

さて、益田市で進めている「つろうて子育てプロジェクト」でも、人の出会いを大切にしながら事業を行っています。特に、「ななめの関係」が多く作れるように意識しています。子どもから見て「ななめの関係」とは、親戚や近所のおじさん・おばさんを代表とする家族ではないけれど身近にいる大人との関係を意味します。一方、「たての関係」は親や教師との関係、「よこの関係」は友だちとの関係を意味しています。どの関係も子どもにとって必要ですが、「ななめの関係」には、多様なものの見方にふれることができる良さがあります。これにより、子どもは視野を広げることができるとともに、人とのかかわり方も学んでいくことができます。地縁が薄くなったと言われる現代だからこそ、地域のいろいろな大人と出会う機会を意図的に作らなければならないと考えています。

今年度、多くの有識者・関係者にかかわってもらいながら、「益田市の未来を担うひとづくり計画」を策定しました。来年度から、「ものではなく、ひと」を柱に、就学前から高校まですべての年代を通じてライフキャリアを体現している人との出会いを位置づけるプログラムを実施します。子どもたちが真似をしたくなるような大人とたくさん出会うことができ、自らの可能性を広げていくことができるように支援していきたいと思います。

「ライフキャリア」とは・・・

日々の目標に対し、能動的に生き、自らの可能性を広げようとする生き方

(益田市の未来を担う人づくり計画策定委員で定義)



社会教育委員のみなさんが、地域でがんばっています！

吉賀町教育委員会 派遣社会教育主事 杉内 直也

みなさんは、「社会教育委員」のことをご存知ですか。吉賀町の「社会教育委員」について、近年のあゆみを紹介します。

吉賀町教育委員会は、10名の方に社会教育委員を委嘱しています。年間6回程度会議を行い、社会教育の振興について議論を重ねています。平成22年から「家庭教育支援」をテーマに取り組んでいます。平成23年には保護者を対象にアンケート調査を実施し「家庭教育支援のあり方」についての提言書をまとめ、教育委員会に提出していただきました。その後、その提言をもとに「家庭教育支援」がどのように推進されているのかをそれぞれの活動現場や地域で実態把握されました。

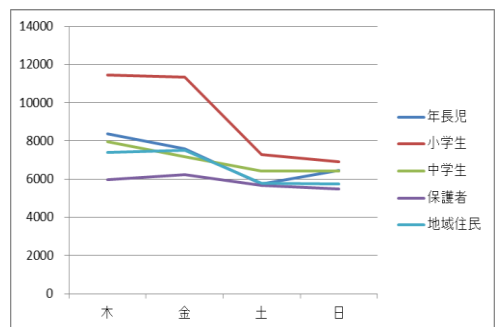
その後の議論の中で、『最近、田舎の子は車で送迎が多くなっており、都会の子よりも活動量が少ないのではないかと』ということが話題になりました。そのことをきっかけに、実際の活動量についても実態把握をする必要があるということで、家庭生活アンケートに併せて、歩数計を活用した1日の運動量・活動量調査を実施し、生活実態や活動量を客観的な数値として捉えていきたいと考えました。

町内の年長児、小・中学生とその保護者、教職員、地域住民など700名以上の方の協力を得て実施することができました。平日・休日を含めた4日間の調査を2回行い、調査結果の分析は、福岡教育大学の井上豊久教授にお願いしました。分析をもとに、吉賀町はどういう傾向がみられるのか、どのようなことに取り組んでいけばよいのかを協議していきました。その結果、次のようなことが浮かび上がりました。



[社会教育委員の会の様子]

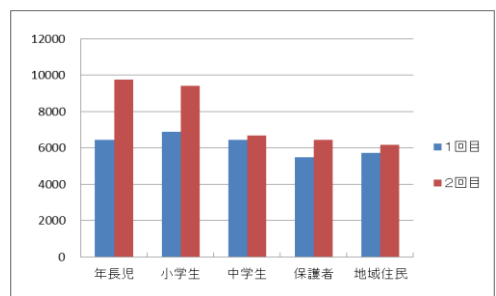
- ・子どもは平日に比べ休日の歩数は少なく、小学生では約4000歩以上少なくなっていること
- ・歩数だけではなく、メディアとの関わりについて更なる取組が必要であること
- ・2回の調査を実施することで、歩数については1回目よりも2回目の方が増加しており、調査すること自体が啓発になっていること など



[1回目の4日間の歩数の比較]

現在、地域の実態に合わせて課題を解決していくためにも、吉賀町の家庭教育で大切にしたいことをまとめている途中です。今年度中には、「家庭教育のいろは」を作成し、町民のみなさんに啓発していく予定です。

益田管内においては、吉賀町だけでなく、益田市、津和野町でも社会教育委員がそれぞれ素晴らしい取組を展開しています。**「話し合いだけでなく話し合いをもとに実践する社会教育委員へ」**を合言葉に「地域ぐるみの子育て」の中心としてますますの活躍が期待されます。



[休日(日曜日)の歩数の比較]

社会教育委員の存在や活動について、みなさんの関心が高まり、ご支援いただく機会が増えることは、住み良い地域づくりにつながります。ぜひ、お近くの社会教育委員に声をかけていただけたらと思います。